Handbuch der speziellen Therapie innerer Krankheiten に "Behandlung mit heissen Wasserbädern" を書いている（東京医事新誌九七九、九九八、一〇〇一号「熱水浴療論」）。日本人は四三～四五度の熱水浴をするとしてその生理作用を述べているが、熱浴による頭部の熱感、圧重等の苦痛および心衰弱を予防するための「かむり湯」を賞揚している。適応症に寒冒、リウマチス、痛風、梅毒、慢性皮膚炎等を挙げている。

一八九七年（明治30）Berl. Klin. W-schr. に "Zur Lehre von der Lepra u. ihrer Behandlung" を載せ、草津温泉での癩治療例を報告しているが、癩については Lehrbuch der Inneren Medicine 1900 に最良の療法は大楓子油を内服し、局処にサリチル酸軟膏を用い、42～46度の草津の湯に一日に四～五回入ることで、これにより神経の肥厚だけは残るがその他の症状は消失すると言っている。

なお同内科書に載る温泉治療を試むべき疾患として右に挙げたもののほかに糖尿病、急性による慢性胃カタル、円形胃潰瘍、神経性胃疾患、常習便秘、急性腹膜炎、結核性腹膜炎などについて述べている。

金沢におけるホルトルマンの外科診療

寺畑喜朔

明治八年七月、スロイスの後任として金沢医学所に着任したお雇蘭医ホルトルマンが行った外科診療は、藤本純吉筆記による「外科患者治験録」（金沢市立図書館藤本文庫）によって、その概要を知ることができる。

この治験録（カッコ内はホルトルマンの明記された症例数）には、膿瘍十例（五例）、瘻孔六例（二例）、腫瘍、腫瘤五例（四例）、外傷（打撲、骨折など）六例（四例）、関節炎五例（二例）、その他（壊疽、動脈瘤、兎唇）の三十五症例が記載されている。

(1) 消毒には石炭酸液二～四%、ヨードチンキを使用
(2) 麻酔使用例（肢指切断、腫瘍・腫瘤剔除など）ではクロロホルムを使用
(3) 膿瘍、瘻孔などの治療は切開排膿する。症例により

瘻孔などには石炭酸液やヨードチンキを注入する。また、膿瘍に対しては、切開やトロカール（套管針）で穿刺した後、撒糸を挿入したり、デラネール管（ドレナージ管）によって膿の排出を促す。また、陳旧性の肉芽組織を清浄にするため、各種の収斂剤や消毒剤を注入したり貼付する。

(4) 腫瘤の剔除、肢指の切断には止血補助のためエスマルヒ帯を用いる。

(5) 関節強直の緩解や術後の鎮痛はモルヒネ皮下注射を施行。

(6) 四肢の外傷や四肢を治療上固定するためにギブス繃帯（有窓ギブス症例もある）を行う。

(7) 貼布する膏剤や組織収斂剤（症状の軽重度により濃度を変えて用いる）には、つぎのものがある。水銀膏、赤降汞膏、加密列浸、ベネチアテレビン油・オレーフ油、タンニン・オレーフ油、アルコール・テレビン油、醋水、硝酸銀

治験録によれば、ホルトルマンが自ら執刀した症例は少ないようで、当時の医学館時代の若い医師を指導し、外科診療を行っていたとみられる記述が散見される。たとえば、右足部の壊疽の手術では「……其術者馬嶋健吉之ヲ司リ「ホロールホルミサシー」ハ太田美農里之ヲ司リ其他石川孝恭藤井貞為藤本純吉等之カ介者タリ……」とある。

つぎにホルトルマンの乳癌手術記録をあげる。

右方之乳癌、士族坂井国知妻、明治九年九月廿三日入室

同日手術ヲ行フ其手術ヲ行フヤ先ツ介者ヲシテ「ホロロホミサシー」ヲナシ保氏「スカルペ」ヲ取リ図ノ如ク先ツ乳房上ニ斜径ニ想像線ヲ立テ其線ノ両端ニ向テ両側ニテ弓状ニ皮膚ヲ切リ下方ヨリ漸々上方ニ向テ剝離シ全乳房ヲ除去ス后小動脈ヲ結締スルコト数箇創面ヲ清潔ニシ両切縁ヲ接着シ纏糸及結節縫合ヲ為シ后撒糸及布片ヲ置キ圧定繃帯ヲ施ス但シ結節縫合十一纏糸縫合六

保氏日往昔ハ乳癌手術ニ二箇ノ法アリ一ハ全乳房ノ切除法一ハ局部切除法ナリ然レトモ輓近ニ至テ局部切除法ヲ行フモ直チニ他部ニ併発スルヲ検スルカ故ニ此法ヲ廃棄シテ只全切除法ノミヲ用ヘリト且乳腺ハ皮膚ト接スルコト密ニシテ下位ノ筋即大胸筋トノ接合緩粗ナリ由テ乳房ヲ取握シテ筋上ヲ滑動シ得ルカ故ニ全乳房ノ切除法ハ筋トノ剝離困難ナラス

同日薬剤ヲ与ヘス只仰臥セシメ運動ヲ禁ス但シ患部疼痛

劇シキトキハモルヒ子ノ皮下注射ヲ行ヘシト

九日廿四日　重炭酸曹達一戔　亜括八号　毎時一匙　牛乳、肉羹汁ヲ与フ

廿五日　繃帯及縫合糸帽針ヲ除去シ絆創膏条ヲ数箇貼ス

廿六日　絆創膏条ヲ除キ更ニ其ノ中央ニ二箇ノ絆創膏ヲ貼シ且カルボルシユール二ペルセントノ者ヲ撒糸ニ蒸シ交換スルコト毎十五分時間ナルベシ

廿九日　赤幾那皮煎八号　毎時一匙

ヘ子チアテレビン油一戔　ヲレーフ油七戔　撒糸ニ蒸シ創傷部ニ貼スルコト一日三回但カルボル酸止

十月九日　硝酸銀ヲ以テ創縁ヲ焼灼スルコト一日一回但シ新生皮膚組織ヲ触ザル様ニ能注意スベシ

十月〇日　加密列浸ヲ撒糸ニ浸シ患部ニ貼ス但シヘ子チアテレビンヲ止ム

十月十八日　沃陳丁幾　朝夕一回創縁ニ塗布　但硝酸銀ヲ止

この症例からみて、ホルトルマンは十九世紀後半のヨーロッパにおける外科診療の趨勢の一端をかなり伝えたものといえよう。

（金沢医科大学）

陸海軍に於ける初期の脚気病対策

佐久間　温　巳

我が国で始めて、国の軍隊といえるものが成立したのは、陸軍では、明治二年秋、大阪で結成された生徒隊、東京では、明治四年二月二十二日、薩、長、土三藩士で結成された御親兵である。他方、海軍の成立は、慶応四年四月二十八日、幕艦四隻を国有にし、海軍総督大原重徳の指揮下においた時が最初であると考えられる。

記録によると、これらの軍隊で、著しく脚気が発生したのは、大阪では、明治三年の夏、東京では、明治五年の夏であった。軍隊脚気に関する当時の対策、治療法については、充分な資料がなく、詳細は不明であるが、ボードイン、アツキンなどの著書が訳されているので、これらに準じて行われたものと考えられる。また、少し後になれば、アンダーソン、メーエルの著書の邦訳、石黒忠悳の著書、脚気病院報告などの他、石黒忠悳、高木兼寛の回想録、講